

皮膚科のトリビア

246

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●某病院感染症内科病診連携連絡会から

令和6年7月12日

大動脈瘤破裂・解離と キノロン系抗菌薬

キノロン系抗菌薬使用は大動脈瘤破裂・解離を2倍増加させることが米国の疫学調査で判明した。大動脈瘤またはそのリスクがある人、動脈硬化性血管疾患、高血圧症、Marfan症候群、Ehlers-Danlos症候群、高齢者への使用は避け、代替薬がない場合のみキノロンを使用するようにアメリカ食品医薬品局(FDA)が勧告している。

一言コメント

「これは知らなかった。弾力線維性仮性黄色腫、全身性アミロイドーシスもリスクに含まれるだろう。」

●某製薬会社主催カンファレンスから

令和6年8月10日

乾癬抗体製剤の効果が 3カ月間持続する理由

乾癬の治療薬である抗IL-23p19抗体製剤、チルドラキズマブは、半減期が3週間ほどであるにもかかわらず、12週間に一度の治療で効果が維持される。この理由は、分子レベルの中和に加えて、乾癬でもともと増加しているTh17細胞、低下しているTreg細胞の不均衡な状態から、Treg細胞が増加して正常に戻り、IL-10などの抑制性のサイトカインが増えることも大きく関与している。

一言コメント

「上昇しているIL-23の中和だけの効果なら4週おきの治療が必要なはずである。以前から不思議だったが少し納得できた。」

●日本皮膚免疫アレルギー学会職業アレルギー専門部会勉強会から

令和6年9月3日

職業性皮膚疾患の労災申請

厚労省が公開している労働災害統計によると、本邦で2021年に労災保険の給付を受けた労働者は1,000人あたり9.7人で、そのうち75%は負傷、13%が腰痛などの筋骨格系疾患であった。皮膚障害は1,020件で、全体の0.2%と少なく、石綿関連疾患とほぼ同程度である。一方、EU加盟27カ国を統括する欧州労働安全機構からの報告では、13%が皮膚疾患であるとされ、大きな違いがあった。職業性皮膚アレルギーが労災として申請されることは少ないが、今後は相談窓口の整備や、検査用アレルギーの受託サービスの充実、治療と仕事の両立支援などを進めていく必要がある。

一言コメント

「皮膚科開業医による職業性の接触皮膚炎の労災申請はハードルが高いと感じている。アレルギー特定のための検査、産業医との連携は、現時点では不十分といわざるを得ないので、対応策を学んでいきたいと思う。」

●第88回日本皮膚科学会東部支部学術大会から 令和6年9月15日

アリナミン®Fの大量静注による下腿潰瘍

60歳代男性、高度の意識障害で救急搬送。ウェルニッケ脳症の診断となりアリナミン®F 1,500 mg/日での点滴静注が開始された。経過中血管外漏出を複数箇所できたとし、5日目に両下腿伸側に壊死が生じ、10日目に潰瘍化した。アリナミン®Fは高浸透圧、低PHで血管外漏出による壊死、潰瘍が報告されている。またビタミンB₁欠乏(脚気)による末梢神経障害も下肢の潰瘍のリスク因子となる。

一言コメント

「アリナミン®Fは元気が出るにんにく注射として、美容クリニックなどで使用されているらしい。においがニンニクに近いので、偽って使われているようだ。症例にあたった経験はないが、注意しておこう。」

●第88回日本皮膚科学会東部支部学術大会から 令和6年9月15日

メンデルのランダム化解析とは

メンデルのランダム化(Mendelian randomization: MR)解析は、SNP(一塩基多型、遺伝情報を保つDNA配列を構成する1つの塩基が置き換わる現象)などの遺伝子の情報を利用して、観察研究でおこりやすい「交絡」を排除し、生活習慣などの要因と疾患との因果関係を調べる方法。ランダム化比較試験がむずかしい場合に、メンデルの法則に従った生まれつきの遺伝子に備わっている「ランダムな割り当て」を擬似的に利用するため、信頼性の高い因果関係の証拠が得られる。まず、解析したい要因に強く関連するSNPを選び、その型によって、事前に要因のあり、なしを遺伝的に予測する。次に予測された要因が高いグループと低いグループに分け、この2群間で疾患リスクを比較することで、要因と疾患の間の因果関係をより正確に推測できる。

一言コメント

「生活習慣病などで盛んに用いられている。交絡バイアス(第3の因子が介在し、見かけ上の因果関係を

生む現象)を排除することができ、従来の観察研究で困難だった因果関係の評価が可能とのこと。ちょっとむずかしい。」

●第88回日本皮膚科学会東部支部学術大会から 令和6年9月15日

PCSK9が乾癬の病因と関連している

脂質代謝経路は乾癬の発症に関係するといわれていて、スタチンなどの脂質低下薬が有効との報告もある。しかし従来の観察研究では交絡因子が存在するため、因果関係の解釈はむずかしかった。LDLコレステロールをバイオマーカーとし、スタチンの標的であるHMG-CoA還元酵素(HMGCR)、エゼチミブの標的であるNiemann-pick C1 like 1(NPC1L1)、アリロクマブなどの標的であるproprotein convertase subtilisin/kexin type 9(PCSK9)を曝露因子としたMR解析を行った。解析の結果、PCSK9の阻害は乾癬発症リスクの低下と有意な関連を認めた。一方でHMGCR阻害、NPC1L1阻害に関しては有意な関連はみられなかった。PCSK9阻害薬は乾癬リスクを考えた脂質低下薬選択の第一歩となる可能性がある。

一言コメント

「乾癬にPCSK9阻害薬が有効というわけではないが、乾癬病変部皮膚にはPCSK9の高発現があるらしい。ちなみに、PCSK9阻害薬とは家族性高コレステロール血症と既存治療でLDLコレステロール目標値に達しない心血管イベント高リスク患者に適応がある抗体製剤で、プラルエント®(アリロクマブ)、レパーサ®(エボロクマブ)が上市されている。」